

お薬のしおり

せきとくすり No.73 (H19.10)

東京医科大学病院 薬剤部

暖かくすこしやすい日があったかと思えば、肌寒い日もあるといった気温の変動の大きい季節となりました。このような時期にはかぜをひきやすいものです。かぜをひくことで咳を伴うことが多くありますが、今回は咳と薬に関するお話をしたいと思います。

咳は呼吸器系器官の大切な生態防御反応の一つです。咽喉（のど）や気管等に異物が入ったり痰などの分泌物がたまると、迷走神経という神経を伝わり反射的に『咳をしなさい』と脳から指令が出ます。このようにして咳をすることで、異物や痰を取り除くことができるのです。また、咽喉や気管に炎症が起きていると、その部分が空気中の小さなほこりなどでも刺激され、咳がでたりします。

咳は、おおまかに分けると、痰を出そうとするような「湿った咳」と、空気だけを出すような「乾いた咳」に分けられます。



咳にはその原因となる病気があり、原因にあった薬を飲むことが大切になります。また、頑固な咳は胸の痛み、頭痛だけでなく、ときには肋骨骨折、失神をもたらすこともあり、このような場合にはやはり鎮咳薬（咳止め）が必要となります。

（ただ、咳を抑えすぎると、気道の狭くなった状態が続いてしまうことがあり、肺の機能をかえって悪化させることがあるので注意が必要です。）

感染症の場合や慢性気管支炎のときは、痰を伴う咳がでます。このようなときは咳を抑えてしまうと、痰で気道がふさがってしまい、かえって症状が悪くなってまうことがあります。そこで、咳を抑えるよりも痰の排出がスムーズになるような薬（去痰薬）（ムコダイン、ムコソルバン等）を使用します。

痰を伴わないような「乾いた咳」いわゆる「からぜき」が続く場合には、鎮咳薬は特に有効です。

鎮咳薬のなかでも、『咳をしなさい』という脳からの指令を抑えて咳をしずめる薬

は中枢性鎮咳薬（リン酸コデイン、アストミン等）とよばれます。また、気管支を拡げて空気の通りをよくすることで咳を抑える気管支拡張薬（テオドール、スピロペント等）も使用します。この気管支拡張薬や去痰薬は末梢性鎮咳薬と呼ばれたりもします。中枢性鎮咳薬のなかには鎮咳作用と去痰作用を併せ持った薬もあります（アスベリン等）。

同じ痰を伴わない咳でも、気管支喘息や咳喘息の症状には、気管支をひろげる薬やステロイド薬の使用により症状が軽くなります。



時には、咳の原因が服用している薬であった、ということもあります。高血圧の治療に使用されるアンジオテンシン変換酵素阻害薬（ACE 阻害薬）と呼ばれる薬では、副作用として「からぜき」がおこることがあります。もし、このような症状がおきていましたら、主治医に相談のうえ、他の血圧降下剤にかえて経過をみるようにすると良いかもしれません。

この他、最近増えてきた慢性の咳に、胃食道逆流症に伴うものがあります。この病気は欧米人に比べて日本人には少ない病気でしたが、食生活の欧米化などにより増加傾向にある病気です。胸焼け、胸痛などの症状を伴う場合もありますが、咳のみを症状とする場合もあります。胃食道逆流症によって咳がでる理由として、胃から逆流してきた胃酸が気管・気管支に入ってしまう刺激を起こしているという説や、逆流した胃酸が食道を刺激し、その刺激が咳を起こす反射として迷走神経へ伝わってしまい、脳から『咳をしなさい』と指令がでていているという説が考えられています。治療としては、胃酸が出過ぎてしまうのを抑える薬（タケプロン、ガスター等）を使用します。気管支喘息などで使用する気管支拡張剤により胃食道逆流症が悪化してしまうこともあるので、注意が必要です。気になる症状があった場合、医師に相談してみると良いでしょう。

どちらにしても、体調をくずしやすい季節は睡眠を充分にとり、かぜをひかないようにすることが、頑固な咳から解放される最良の手段といえます。不摂生は禁物です。